

---

# アルビオン王国物語

神楽耶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アルビオン王国物語

### 【Nコード】

N9316F

### 【作者名】

神楽耶

### 【あらすじ】

邪悪な存在と後に始祖と呼ばれる事になった者、そして始祖と共に邪悪な存在と戦った者達がいた。人間と魔族邪悪な存在が人間であったのか魔族であったのかそうではない別のなにかだったのか始祖が人間であったのか魔族であったのかそうではない別のなにかだったのかどちらもわからない。だが邪悪な存在と始祖達の後に聖戦と呼ばれる戦いは始祖達の勝利に終わった。平和の時代が来た。戦士達は故郷に戻り多くの国ができた。始祖が去り、邪悪な存在への恐怖も忘れ去られた。多くの国は争い消えていった。聖戦は伝説に

戦争は歴史にこれはそんな時代の物語剣と魔法が織り成す物語

Prologue (前書き)

初めての小説です。誤字脱字もたくさんでるでしょう。設定やその他の事でも矛盾や破綻するかもしれませぬ。構想も全く考えてませぬ。長い目で見てください。

## Prologue

Prologue

邪悪な存在と後に始祖と呼ばれる事になった者、そして始祖と共に邪悪な存在と戦った者達がいた。

人間と魔族

邪悪な存在が人間であったのか魔族であったのかそうではない別のなにかだったのか

始祖が人間であったのか魔族であったのかそうではない別のなにかだったのか

どちらもわからない。

だが邪悪な存在と始祖達の後に聖戦と呼ばれる戦いは始祖達の勝利に終わった。平和の時代が来た。戦士達は故郷に戻り多くの国ができた。

始祖が去り、邪悪な存在への恐怖も忘れ去られた。

多くの国は争い消えていった。

聖戦は伝説に

戦争は歴史に

これはそんな時代の物語

## 設定その1

アルビオン王国の王都ロンディニウムからすこし離れた王立魔法学院。

ここにはアルビオン王国の貴族、他国からの留学生が魔法等を学んでいる。

アルビオン王国は大陸の南端に位置する大国で豊かな大地と海の恩恵を受けている。特に海の方こう側のホウライとの交易で莫大な利益を得ている。そのため魔法学院は周辺国よりも高度である。留学生の多さはそれに関係している。

大陸にはアルビオンやホウライだけでなく多くの国があり、魔族の国もある。

皇帝を名乗れる者は神聖シンフォニア帝国だけで神聖シンフォニア帝国は始祖の直系である。神聖シンフォニア帝国は大陸の中央に位置し広大な領土をもっている。帝都はシンフォニア。軍事力は大陸一。

北のラッキー山脈の方こうには始祖が邪悪な存在を封印したといわれている

アルビオン王国

大貴族は広い領土を持つ。中流貴族は小さな領土を持つ。

下級貴族は領土を持たない。領土は家に与えられたもので滅多に失わない

領主は貴族であるが政務は選ばれた市長が行う場合が多い。市長には貴族が多いが平民もいる

爵位

侯爵

伯爵

子爵

男爵

準男爵

の順

他に一代限りで

騎士

がある。騎士は多大な功績と実力が認められた者が王から選ばれる。貴族、平民を問わず選ばれるため皆の憧れ。騎士に選ばれた者は平民でも子爵並みの扱い。中には小さな領土を貰える者もいる。

ギルド

各国にはギルドがあり、迷い猫の搜索から魔物退治まで依頼があればなんでもする。

ギルドは一国でまとまっているが流浪の者も基本的にむかえ入れる。ギルドは街に一つはある。

ギルドに登録したものはランクがある。SSS、SS、S、AAA、AA、A、B、C、D、E、Fがある。依頼の実績と実力試験でランクは上がる。ギルドマスターも各国に一人いる。後継者はギルドマスターの指名。一年に一度神聖シンフォニア帝国の帝都シンフォニアでギルドマスターが集まり会議をする。

魔族

人と変わらない姿をとる事ができる。様々な種族がいる。基本的に人間より強いがあまり数は多くない。知性は人より少し劣る種族が多いがとても高い種族もいる。人間との関係は良好だが人間嫌いの者も少なくない。

魔物

魔族と違い獣の姿をしている。おとなしい者もいるが人を襲う者が大半。退治してもどこからか現れる。魔物の毛皮や肉等を売買している。人に従う魔物も稀にいる。

## 1話

魔法学院

先生

「進級おめでとう。といつてもあがれなかった奴はいないんだがな。君たちは三年間基礎を学び後一年基礎を学べばいろいろな進路がある。まあとりあえず仲良くいこう。早速だが授業を始める」

先生が早口に言う。あいさつが早口で短いのは一人の生徒が凄まじい威圧感をだしているからだ。威圧感をだしている生徒の名は『サヤ・ジークハルト』アルビオン王国の侯爵家で三大貴族と呼ばれる家の娘である。

「サヤなんか怖いよ。どうかしたの？」

声をかけたのはアリシア・ソレイシィ。三大貴族の一つである。

サヤ

「あの無能と同じクラスなんて最悪ですわ」

アリシア

「無能なんて言ったらダメだよ。カグヤはお兄さんなんだから」

サヤ

「あれは兄ではありません！」

大きな声に先生も注意する。

先生

「そこ、うるさいぞ。じゃあソレイシィ復習だ。魔法について言うてみる」

アリシア

「えーと、魔法には属性があつて火、水、土、風、雷があります。これは基本で派生もあります。」

先生

「よし。他にも光と闇があるが光は始祖以外はいない。闇は命を代償にするといわれて使える奴もいない。無理矢理使った奴は命を失

うからな。今日は基本的な魔法を復習しよう。この中で魔法の矢が  
使えない奴はいないな。」

男子A

「フリーユージェルは魔法の矢が使えませんよ」

侮蔑の入り交じった口調で言う。

先生

「……そうか。とりあえずやってみよう。フリーユージェル、カグヤ・フ  
リユージェル。前に出てきなさい。」

カグヤ

「……………」

男子B

「カグヤなら寝てますよ。」

先生

「……では代わりにライト・クライン」

ライト

「はい。」

サヤ

「あのクズ」

先生

「ではクライン、魔法の矢だ。小さなものにしるよ。」

ライト

「わかりました。」パリッ

先生

「雷だな。よくコントロールできているぞ。戻っていいぞ」

ライト

「わかりました。」先生

「魔法の矢は基本だが戦闘ではよく使う魔法だ。クラインのように  
無詠唱でできないとダメだぞ。魔法には呪文の詠唱が必要だ。しっ  
かり練習すれば詠唱破棄や無詠唱でも出せるようになる。では今日  
はこれまで。解散だ。」

ライト

「カグヤ起きろ。授業は終わったぞ」  
カグヤ

「ん、ああ。帰るとするか。」  
扉に向かう二人

サヤ

「……………」

ライト

「ずいぶん睨まれてるな。」

カグヤ

「知らないな。さっさと帰るぞ。」

ライト

「待て。置いてくな。」

男子A

「あの無能が同じクラスじゃ行事は不利だね。少なくとも一人分人数が少ないからね」

男子C

「そうだな。でも他のはかなり強いから大丈夫だろ。」

男子A

「学年トップクラスの三大貴族がいるからな。」

アリシア

「そんな言い方はいけないと思うよ。」

男子A

「ソレイシィさん。でも……」

サヤ

「アリシア、さっさと行きましょう。他人の力をあてにするような者は放っておきなさい。」

アリシア

「待ってよ。サヤ」

男子A

「やっぱりジークハルトさんは凄いな。威圧感が違う。」

男子C

「でもいつもより凄くなかったか？」

男子A

「無能な兄と同じクラスになったからだろう。」

男子C

「あの二人って兄妹だったのか？」

男子A

「知らなかったのか！あの二人は双子らしい。無能過ぎて家から出されたらしい。」

男子C

「へー」

ライト

「明日は精霊召喚だな」

カグヤ

「そうだったか？」

ライト

「基礎科の最後の年に精霊召喚をするのは皆知っているぞ」

カグヤ

「まあ、がんばれ」ライト

「がんばるのはお前だ。凄い精霊を召喚して見返してやれ」

カグヤ

「明日の精霊召喚は何も出てこない」

ライト

「それはないだろ。」

カグヤ

「さてな」

## 2話

先生

「今日は皆知っていると思うが精霊召喚を行う。騒がずについて来なさい」

アリシア

「緊張するね」

サヤ

「緊張するほどの事ではありませんわ」

ライト

「強い奴だといいな」

カグヤ

「……………」

……………

……………

校庭

先生

「精霊召喚について説明するぞ。魔方陣に血を流す事で精霊が召喚される。召喚した精霊と契約を行って終了だ。精霊は常に姿を保つ事はできない。だからなにか器にする事が必要だ。簡単な装飾品、指輪や腕輪が一般的だ。では準備ができた者から始める。」

アリシア

「じゃあ、私、行きます」

魔方陣に歩くアリシア。魔方陣に血を流す

ブウウウウン

水の精霊

「あなたがマスターですか？」

アリシア

「そ、そつだよ。」

水の精霊

「では契約を。私に名前を」

アリシア

「デイーネはどうか？」

デイーネ

「デイーネ、良い名前です。器の形はどうしましょう？」

アリシア

「じゃあ指輪に。」

デイーネ

「わかりました。いつでも呼び出してくださいね。」

人の姿から指輪に変化していく。

先生

「凄いな。中級の水の精霊か。上級生にもなかなかないんだがな。」

では次。」

サヤ

「私が行きますわ。」

魔方陣にむけて歩く。その顔は自信に満ちている。魔方陣に血を流す

ブウウウウン

火の精霊

「あなたが私のマスターか？」

サヤ

「そつよ」

火の精霊

「では契約を。名を頂きたい。」

サヤ

「サラはどうかしら。」

サラ

「構いません。器の形は？」

サヤ

「腕輪にして。」

サラ

「わかりました。」

姿が人から腕輪に変化していく。

先生

「さすがだな。これだけの力なら上級精霊だろう。」サヤ

「当然の結果ですわ。」

先生

「最初の二人が凄かったが普通召喚した時は下級精霊だからな。が  
つかりするなよ。」

……

……

先生

「後二人だな。」

結局二人以外は下級精霊だった。

ライト

「次はオレが行きます。」

魔方陣にむけて歩いていく。魔方陣に血を流す  
ブウウウウン

風の精霊

「君がマスターかい？」

ライト

「そつだ。」

風の精霊

「じゃあ契約だね。名前をもらえるかな」

ライト

「ジンでどうだ？」

ジン

「いいよ。器の形は？」

ライト

「指輪だ」

ジン

「わかったよ。それじゃあね。」

姿が人から指輪に変化していく。

先生

「中級か。このクラスは凄いな。最後はフリーユージェルだな。」

カグヤ

「……………」

ライト

「起きろよカグヤ。寝てる場合じゃあないぞ。」

どうやら眠っていたようだ。

カグヤ

「……………ああ。」

魔方陣に歩いていく。そして血を流す。

「……………」

ライト

「……………なにも起きないな。」

男子A

「フリーユージェルの奴召喚に失敗したぞ！さすがは落ちこぼれだ。」

先生

「魔方陣になにか問題があったのかな？フリーユージェルは後日もう一

度だ。」

サヤ

「……………あのクス」

先生

「一ヶ月後には武芸大会があるからな。今日は精霊と親交を深める。

解散」

ライト

「気にするなよ。魔方陣が壊れてただけだ。」

アリシア

「そうだよ。もう一度すれば大丈夫だよ。」  
「サヤ」

「これ以上恥を晒さないでほしいですわ。」  
「そう言っただけで去っていくサヤ。」

「アリシア」

「待ってよー」

### 3話

魔法学院学院長室

先生

「フリーユージェルは二度召喚に失敗しました。」

学院長

「……そうか。君には大変だろうが面倒をみてやってくれ」

先生

「しかし、魔法も使えない精霊召喚も失敗した。そんな生徒を進級させてよかったんですか？」

学院長

「名門、それもギルドマスターの家の者を無下にはできんよ……。」

先生

「それもわかりませんが……。」

学院長

「ともかく彼の事は頼むぞ」……

……

先生

「精霊は召喚する者の力に反応して召喚される。同じ精霊はいないし過去の時代にも存在しない。召喚された時に存在が生まれるという事だ。召喚した者が死んでしまったり、深い傷を負った時、精霊自身が深い傷を負った時、精霊は消えてしまう。そうなれば精霊は二度と呼び出せない。中には精霊の力だけで生きている精霊もいるが滅多にいない。」

先生が授業を続ける

先生

「精霊の力を借りれば魔法が上手く使えたり、武器に力を付与する事もできる。魔法でも武器に力を付与できるが制御が難しいからな。戦闘において精霊を上手く使う事が重要だ。戦闘だけでなく精霊は

一生のパートナーだから大切にするように。」

終業の鐘が鳴る

先生

「次の授業は一週間後に迫った学年での武芸大会にむけての練習だ。校庭に遅れないように来るように。」アリシア

「武芸大会かあ。ちよつと怖いね。」

サヤ

「あなたぐらい強ければそう簡単に負けないでしょう?」

アリシア

「私なんか全然弱いよ」

サヤ

「よく言いますわ。まあ戦ってみればわかりますわ」

アリシア

「後一週間がんばろうね」

サヤ

「敗北は許されませんわ」

校庭に行く二人

ライト

「ずいぶん張り切ってるな。まあ負けるつもりはオレもないんだがな。」

カグヤ

「死なない程度にな」ライト

「お前の方が心配だ。魔法がな……」

カグヤ

「さっさと行くぞ。」

ライト

「ああ。」

……

……

校庭

先生

「皆揃ったな。一週間後の学年での武芸大会について説明するぞ。練習では学院で用意した殺傷能力の低くした武器で戦ってもらう。もちろん魔法も軽めにやれ。だが武芸大会本番ではギルドから実戦経験豊富な人達が審判として来てくれるから自分で用意した武器を使ってもいい。魔法も全力でやっていい。怪我はもちろん死ぬかもしれないから棄権するのもいい。相手の実力と自分の実力がわかるのも大切だ。説明はこれまでだ。各自練習を始めていいぞ。加減は間違うなよ。」

先生の話が終わると皆は武器を取りに行った。

……

……

ライト

「風のマナよ集いて敵を射て 魔法の矢 一矢」

「うわー」

クラスの男子とライトの練習試合。

ライト

「やっぱり試合はいいな」

男子

「やられる身にもなってほしいよ」

ライト

「わるいわるい。そういえばずいぶん数が少ないな。」

男子

「皆手の内は見せたくないんじゃないかな。」

ライト

「なるほどな」

男子

「ライトは武芸大会どこまでいけると思う？」

ライト

「まあ上級生もいるしな。できるだけ勝ちたいけどどうだろう。」

男子

「毎年武芸大会には偉い見物客が来るからね。上級生は結果を残していい進路を狙ってるからね」

ライト

「オレ達もがんばらないとな。」

武芸大会にむけて練習をする者

サヤ

「今さらどうなるものでもありませんわ。いつもの力を出せば勝てますわ。」

余裕がある者

アリシア

「大丈夫かな？怪我しないといいんだけど」

心配する者

カゲヤ

「……………」

寝ている者

武芸大会に思いを馳せる者達。どのような結果が彼らを待つのだろうか……………」

## 4話

武芸大会前日

アルビオン王国王都ロンディニウム　大国アルビオン王国の王都として近隣の都市とは一線を画した規模をもち、特に人口の増加に伴う増築によりできた何重もの城壁はロンディニウムが難攻不落と謳われる所以である。

そのロンディニウムの中央に位置する王宮

「リア様、明日のご用意はお済みでしょうか？」

メイドはそう言って確認する

リア

「ええ、大丈夫よ。」

そう答えたのは美しい金髪の若く高貴な女性

「しかし、よろしいのですか？このような時に魔法学院の視察など

……」

リア

「このような時だからですわ。それに以前から決まっている事です。変えてしまえば無用な心配をかけるでしょう。」

「わかりました。では、おやすみなさいませ。」

メイドは部屋から出ていく。

リア

「明日が楽しみだわ。」

……

……

アルビオンの国王エドワード王の前に重鎮が集まっていた。

エドワード王

「セウエルスから使者が来た。」

エドワード王の言葉に驚く者はいなかった。隣国セウエルスで將軍ソラスによる反乱が起こっている事は周知の事実であったからだ。

ジークハルト侯爵

「どのような内容なのか」

ジークハルト侯爵家は軍務卿である。

エドワード王

「セウエルス王から支援が欲しいという内容だ」テイベリウス侯爵  
「これは好機。セウエルスに恩を売り、中央進出の足がかりにすべきです。」

テイベリウス侯爵家はアルビオンでも有数の名門貴族であり、軍務卿のジークハルト侯爵家に次ぐ軍閥の長である。

ソレイシイ侯爵

「他国の内乱等に手を出すべきではない。」

クライン侯爵

「かといって何もせず。というのは後々の外交に影響が出るのでは？」

外務卿であるクライン侯爵が言う

ソレイシイ侯爵

「出兵はせずに物資の補給だけしてやれば良いでしょう」

エドワード王

「軍務卿はどう思う」

ジークハルト侯爵

「私も出兵には反対です。セウエルスの反乱軍は精強で手を出せばこちらの犠牲も少なくないでしょう」

テイベリウス侯爵

「軍務卿殿は戦わずして臆したか！我等アルビオンが遅れをとる等有り得ない！」

エドワード王

「うむ。ではテイベリウス侯爵に任せよう。出兵の準備をせよ。」

## 5話

フリユーゲル家邸宅

フリユーゲル家邸宅、その当主の部屋に四つの人影があった。

老婆

「セウエルスへの出兵が決まったようじゃ」

老婆は妖しく光る水晶を見ながら言った。

この老婆がフリユーゲル侯爵家当主ロームルである。ロームルは先代ジークハルト侯爵の正室で今もジークハルト家に大きな影響力を持っている。

ミーシャ

「全て予定通りという事ですね」

リーシャ

「これから忙しくなりますね」ミーシャ・フリユーゲル

リーシャ・フリユーゲル

彼女達は双子でロームルの後継者としてジークハルト家の流れを汲む小さな貴族の家から養子としてフリユーゲル家に引き取られた。

ミーシャは士官学校を最年少で卒業し二十歳前半で王国軍人として活躍し王国軍大佐までになっている。

リーシャは老いたロームルの後継者としてギルドマスター代理をしている。ロームルは既に邸宅でのデスクワークのみを行っている。

ギルドマスターとして優秀でいずれ正式にギルドマスターになると言われている。

ロームル

「予定通りという事は明日は間違いなく事が起こる。抜かりはないな」

ロームルはしわがれ声で二人に確認をとる。

ミーシャ

「明日はリア様の警護に私の小隊が学院に駐留します」

ミーシャの率いる小隊は特別任務に投入される事も多く精鋭揃いで小隊単位では王国最強と軍内部で言われている。

リーシャ

「こちらにも既に学院での武芸大会の審判として人は集め終わっています」

学院の武芸大会ではできるだけ本気で闘えるようにギルドから優秀な者を審判にと依頼するのである。例年は現役を引退した老練な者達が主だったが今回は集められる最高の人材を用意していた。それだけの者が武芸大会の審判というのは少し異常と言えた。

ロームル

「王国騎士団もある程度は動くであろう。戦力は十分じゃな」

王国騎士団は騎士のみで構成され軍ではなく王家直属の部隊である。騎士のみで構成されている為その実力はとても高い。

ロームル

「お主はどう思う？」

カグヤ

カグヤ

「それだけの戦力があれば充分だ。それに全ては予定通りという事なら問題ないだろう？」

この部屋にいた四人目はカグヤだった。

ロームル

「その通りじゃな。ではそろそろ休もうか。」

思ったより会議が長引いてしまい既に夜は中頃であった

ミーシャ・リーシャ

「では私達はこれで」

そう言い自室へと帰っていく二人。

ロームル

「今日も良い夢が見れると良いなカグヤ」

カグヤ

「そういう冗談は笑えねえよ」

苦笑しつつ部屋の扉を開ける。

カグヤ

「それじゃあな婆さん」

## 6話

武芸大会当日

魔法学院 教室

先生

「今日は武芸大会当日だ。皆大怪我をしないようにな。試合の順番はよく見ておけよ。少しでも遅れると失格だからな」

武芸大会は多くの生徒が参加する為、同時にかなりの数の試合を行う。その為試合に遅れると失格になってしまう。

先生

「最後になるが危なくなったら棄権するように。君たちは初めての武芸大会だからな」

武芸大会はカグヤ達の学年から参加ができた。

棄権があるのは学年が違う者が試合をする時の為でもある。

先生

「じゃあくれぐれも試合に遅れないようにな。」

先生が教室を出ていく。いつもなら先生が出ていけば雑談が始まるが今日は皆緊張してかあまり喋らなかつた。

サヤ

「今日は静かですわね」

アリシア

「皆緊張してるんだよ。サヤは緊張してないの?」

サヤ

「全くしてませんわ」

アリシア

「……サヤが羨ましいよ」サヤ

「?、そろそろ行きましようか」

アリシア

「そうだね。遅れると大変だもんね」

学院長室

ミーシャ

「アルビオン王国軍大佐、ミーシャ・フリーユージェルです」

ミーシャは敬礼をしながら言う。

学院長

「学院長です」

学院長は内心の驚きを静めながら言った。目の前の女性の軍人の階級が一瞬信じられなかった。見た目の年齢は二十歳より若く見えた。士官学校に在学中ですと言われた方が信じられた。それが大佐だとは信じられなかったがフリーユージェルと聞いてあり得る話かもしれないと思った。名門フリーユージェル侯爵家ならばと思った。

学院長

「今日は警備の方よろしくお願いします」

例年の武芸大会には軍の警備等はなかった。だが今回の武芸大会には王国第一王女リア・アルビオンが視察に来る事になっていた。王女の警護には王国騎士団がいるが用心して小隊を一つ学院に派遣するという事になっていた。

ミーシャ

「いえ、これが仕事ですから。ギルドマスター代理は既に学院に？」

簡単に答えながらギルドマスター代理について聞く

学院長

「ええ、先程こちらに。今は来賓席かと」

学院長は先刻会ったギルドマスター代理の事を思い出した。今会っている軍人と同じ顔であったなど。噂には聞いていたがああ若さでギルドマスター代理というのに驚いた。

ミーシャ

「わかりました。では私はこれで」

ミーシャはそう言って退出していった。

来賓席

ギルドマスター代理、リーシャ・フリーユールは学院の来賓席で学院の教員と話していた

リーシャ

「生徒の避難経路は確認しましたか？」

リーシャは教員に聞く  
教員

「昨日避難訓練という形で行いましたが必要あるのですか？」

リーシャ

「第一王女の視察ともなればよからぬ事を企む輩がでもおかしくないでしょう？盗賊とか」

教員

「それもそうですね」

教員は明らかに考えすぎだという顔をしていた。

平和そうな顔をしている。リーシャはそう思った。今王国は戦争の準備をされていて開戦も間近だというのに。だがその事の一部の者しか知らないのだから仕方ないのかもしれない。それも後少し。

平穩の終わりは近いのだから。

ミーシャ

「姉上ここでしたか」

声がリーシャが思考を止める。

リーシャ

「思ったより遅いんじゃない？」

声をかけてきたのは妹のミーシャであった。

ミーシャ

「十分間に合っていると思いますけど」

リーシャ

「少し外していただけですか」

リーシャは先程まで話していた教員に言う  
教員

「わかりました。」

教員は忙しくまだ仕事が残っていた為早足で戻っていった。

リーシャ

「配置は終わったの？」

ミーシャ

「終わったからここにいるんだけど。そっちは？」

リーシャ

「こっちは特にできることはないんだけど」

ミーシャ

「審判もやらないといけないものね」

今来賓席にいるのはリーシャとミーシャ、ミーシャの副官クリス、

リーシャの秘書シエリーのみであった為二人はいつもの様に話して

いた。

クリス

「大佐、そろそろ到着の時間です」

クリスは上官に王女が到着する時間だと伝える。

ミーシャ

「それでは行きましょうか」

リーシャ

「そうね」

学院正門前

馬車

近衛騎士

「リア様、到着致しました」

リア

「わかりましたわ。」

馬車の中はやはり退屈だったなと思いつながら馬車から降りる。門の前には学院長、ギルドマスター代理、学院の警備を任された軍人達が恭しく礼をしている。

学院長が挨拶をするが

リア

「席に案内してくださるかしら」

王女は学院長の挨拶もそこそこに来賓席へと向かって行った

来賓席

リーシャ

「もう少し丁寧に扱ってやっても良いでしょうに」リア

「最低限の礼儀は守ったつもりですわ」リーシャ

「そろそろ始まるようですね」

会場

学院長

「今日は年に一度の武芸大会です。皆頑張つて……」学院長が開会宣言をし始めた。

ライト

「今日は頑張ろうぜ」

カグヤ

「ああ、そうだな」

気合いを入れているライト。

ライト

「こういった経験は大切だからな」

カグヤ

「戦闘がしたいなら魔物でも狩ればいいだろうに」

ライト

「それもいいけど対人戦闘の機会はそうはないからな」  
カグヤ

「まあ頑張れ」

ライト

「おう、カグヤもな」

学院長

「……では皆の健闘を祈る」

武芸大会が始まった

説明

試合会場のイメージはローマのコロッセオ

## 7話

アルビオン王国上空

アルビオン王国の空は雲に覆われていた。

その雲の中を数十騎の竜騎士が進んで行く。竜騎士の指揮官は幸運だったと思った。アルビオン王国に侵入した夜から今まで厚い雲が自分たちを隠してくれていたのだった。雲の中に居ては目的地に迷わず辿り着けるかが問題だったが目的地は薄くなった雲の向こうに見えていた。

学院

ライト

「お前は何試合目だ？」

カグヤ

「かなり後ろの方だ。お前は？」

ライト

「前の方。そろそろ試合だ。」

学院では試合が次々に行われていた。かなりの人数なので同時に何試合も行われている。

ライト

「そろそろ行くか」

カグヤ

「がんばれよ」

ライト

「……応援に来るとかは思わないのか？」

カグヤ

「忙しい」

ライト

「そんな訳ないだろ……」

「まあいいや。」

ライトは試合の場所に歩いていく  
いつの間にかカグヤは居なくなっていた

試合会場

試合会場には大量の生徒が居た。観戦席は座る所がない程ではない  
がほとんど埋まっていた。

アリシア

「あつ、ライトだ」

ライト

「よう、試合はどうだ？」

サヤ

「同学年には敵はいませんわ」

ライト

「まあそうだろうな」

アリシア

「二人共強気だね」

ライト

「同学年で俺達に敵う奴はいないだろう」

サヤ

「そうですわ」

アリシア

「カグヤは一緒じゃないの？」

ライト

「何処かに行ったよ。応援もしないなんて冷たい奴だ」

サヤ

「なら、さつさとあれから離れなさい」

ライト

「じゃあ俺試合が近いから。応援してくれよ」

サヤ

「逃げましたわ」

アリシア

「逃げたね」

審判

「次の試合を始める。両者前へ」

ライトと男子の二人が前に出る

ライト

「ようやく出番か」

審判

「ルールはわかっているな。わかっているな。戦闘不能の相手に攻撃するのは禁止だ。

それと私の指示には従ってもらおう。  
では始める」

ライトは開始と同時に剣を抜き前に走り出す

相手はいきなり飛び込んでくるとは思わず動揺した

男子

「風のマナよ 集いて敵を……」

魔法の矢で迎撃しようとするが既に間に合わない所まで来ていた

なんとか剣を抜くが剣を弾き落とされる

審判

「そこまで」

ライト

「まあこんなものかな」

審判

「次の試合を……」

サヤは正直面倒だった

実力差が有りすぎる試合だからだ

サヤ

「棄権すれば良いものを」

審判

「では始める」

相手の男子はすぐに剣を抜き詠唱を始める

サヤ

「炎の壁」

詠唱を破棄して火の魔法を放つ

炎の壁は相手の男子を包み込んだ

審判

「そこまで。」

魔法を消しなさい」

サヤは炎の壁を消し礼をして去っていった

アリシア

「やっぱり二人共強いね」サヤ

「相手が弱いだけですわ」

ライト

「そうだな」

それよりそろそろアリシアの試合じゃないのか？」

アリシア

「そうだった」

じゃあ行ってくるね」

審判

「本当にそれを使うのか？」

アリシア

「そうですけど何か？」

審判

「いや、規定には違反していないから良いが……」

アリシア

「じゃあ始めましょう」

審判

「そうだな」

では始めなさい」

アリシアは小さな盾を持っていた

一般の盾は安価な木製が主流で鉄製は少なかった

アリシアの持っている盾はどちらでもなかった

ライト

「……あれってオンディーヌの盾だよな」

サヤ

「そうですわね」

ライト

「学院の大会に持ち出していいものなのか？」  
サヤ

「規定では武器は刃引きしたものでなんでもいい。盾は何も決ま  
ってはいませんしいいではなくて」

ライト

「規定で良くてもあんなもの持ち出しすとはな  
そんなに勝ちたいんだろうか？」

アリシアの持っている盾はオンディーヌの盾と呼ばれていた

水の精霊の加護を受けた盾であると云われ、稀少な魔法鉱石と優れた魔法で作られている

アリシア

「行きます」

アリシアは盾を体の前面に構えて相手に突進する

アンディーヌの盾は小さくアリシアの体の全てを覆えてはいなかった

相手は盾の届かない所に魔法の矢を放つ

ブウウウウン

盾の周りに水の魔力シールドが展開される

ビシイイイイ

魔法の矢は魔力シールドに弾かれる

アリシアはそのまま突進し体当たりをする

審判

「そこまでだ」

審判は体当たりが当たる前に試合を終わらせる

アリシア

「勝ったよー」

ライト

「お前それどうしたんだ？」

アリシア

「家から持ってきたんだよ。」

それがどうかしたの？」

サヤ

「勝手に持ち出して良いんですの？」

アリシア

「お父様がいつも持ち歩くようになって」

ライト

「過保護だからな」

サヤ

「家に飾って置くのは少し勿体無い気がしますものね」

アリシア

「使わないと損だと思っよ」

ライト

「これはアリシアの優勝だな」

サヤ

「そう簡単にはいきませんわ」

アリシア

「すぐに負けちゃうよ」

三人が話していると周りが騒がしくなった

ライト

「一体なんだ？」

## 8話

来賓席

リア

「カグヤの試合はまだなのですか？」

リーシャ

「かなり後ろのようですね。」

二人が話しているとクリスが二人の後ろの方にいるミーシャに何かを耳打ちした

ミーシャ

「北北東から竜騎士と思われる飛行物体が接近。数七十、会敵まで約九分。殿下、避難を。」

ミーシャは敵が学院に接近していると言った

近衛騎士

「ここまで接近されるまで気付かなかったのか！」

近衛騎士の一人が怒鳴る様に言った

他の近衛騎士も声には出さないが同じ様に思っていた

ミーシャ

「恐らく雲の中を進んできたと思われます」

ミーシャは淡々と言う。騎士達はそんな態度に更に口を開こうとするが、

リア

「今はそんなことを言っている時ではありません

一刻も早く学院の生徒を避難させなさい」

学院長

「い、今すぐ行きます」

学院長は突然の事に混乱しつつも生徒を避難させる様に教員に指示を出しに行く

王女の言葉に騎士団も黙り込んだ

ミーシャ

「我が小隊は迎撃に出ます。殿下も避難してください」

リア

「残りたいですが足手纏いになりますわね……  
わかりました」

そう言ってリアは近衛騎士と共に席を立って行く

リア

「リーシャ行きましょう」

リーシャ

「我々ギルドは大会の審判と大会中の学院の警備を依頼されましたからね

我々もここに残って戦いますよ」

近衛騎士

「殿下、時間がありません。急ぎましょう」

リア

「わかりましたわ

二人共死なないでくださいね」

来賓席からリアと近衛騎士が去り、ミーシャとリーシャは接近して

くる竜の編隊を見る。発見した時は一般人の視力では見る事さえできない程だったが今ではその姿をはっきり見る事ができる

リーシャ

「竜の数が七十つて事は兵士は四百ぐらいね」

ミーシャ

「王都からの増援が到着するまで持ちこたえれば私達の勝ちですね」

リーシャ

「ここまででは上手く事が進んでいるわね」

ミーシャ

「来ましたよ

話は終わりです」

学院の外壁はそれなりの高さがあったが空を飛ぶ竜騎士の前では無意味だった。そもそも扱いが難しく、数の少ない竜を揃えられる国が限られているので竜が攻めてくる等想定していなくて当たり前であつた。

外壁の上には遠距離系の魔術師と弓を持たせた兵を配置するが数が少なかった。既に竜騎士は眼前にまで迫っていた

「射て！」

指揮を任された大尉が叫ぶ。

様々な魔法と矢が竜騎士に向かっていく

竜は大きく口を開き『ブレス』を放つ

大半の魔法と矢が消滅し、残った魔法と矢も竜に僅かな傷をつけただけだった

「まずは邪魔な兵から片付ける！」

竜騎士の指揮官は部下に命令を出す

既に四百近い兵が試合会場付近に降ろされていた

「アルビオン側の戦力は小隊一つに傭兵くずれだ。討ち取って手柄にせよ！」

竜騎士七十騎、兵士四百とミーシャ率いる小隊四十、ギルドから派遣された三十、合わせて七十の戦いが始まった

## 8話（後書き）

遅れてすみません。少なくともすみません。インフルエンザで学校が休みです。手洗いうがいはしましょうね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9316f/>

---

アルビオン王国物語

2010年12月17日02時44分発行